

2022. 5. 22 (日) 使徒1:9~14

1:9 こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。

1:10 イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。

1:11 そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

1:12 そこで、使徒たちはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に歩くことが許される道のりのところにあった。

1:13 彼らは町に入ると、泊まっている屋上の部屋に上がった。この人たちは、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった。

1:14 彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。

<説教>

「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(1:8)とイエスが言われたとおり、使徒たちがイエスの証人となるためには彼らの上に聖霊が臨んで、彼らが聖霊の圧倒的な力を受ける必要がどうしてもありました。

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。」(1:4)また、「見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」(ルカ 24:49)とイエスは約束し、命じておられました。

更には十字架で死なれる前の「最後の晩餐」のときも使徒たちに言うておられました。

「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてください。あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。」(ヨハネ 15:26)、「わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。」(ヨハネ 16:7)

このように、地上にある使徒たちの上に聖霊が臨むためにどうしても必要なことは、御子イエスが父なる神のおられる天に上げられて、その天からイエスが父なる神とともに聖霊をお送りになることでした。

イエスは地上の使徒たちに、ご自分が使徒たちのもとを離れて、天に引き上げられ、彼らの目には見えなくなった有様をはっきりとお見せになりました。(9-11)

「雲が彼らの視界から彼(イエス)を取り上げた」(9b 直訳)と書かれている〈雲〉は旧約聖書以来、神の臨在と栄光を表すものでした。

そうやって、イエスはご自分が確かに復活者として、復活のからだをもった人間として、同時に神の御子として、神の御意思によって、神の力によって、神の栄光のうちに、神のおられる天に〈上げられた〉(受身形)ということを使徒たちにお見せになりました。

確かにこの昇天の出来事は使徒たちにとっては突然のことであり、言うなれば強制的にイエスと引き離されてしまったわけで、悲しむべきことだったでしょう。

それで〈雲〉に遮られてイエスの姿が見えなくなっても〈使徒たちは天を見つめていた〉のでしょうし、もしかしたらイエスがかつて山で栄光の姿に変わられた時のように、すぐにまた〈雲〉が消えてイエスが姿を現し、もっとずっと自分たちと一緒にいてほしいと思っていたのかもしれませんが。

しかし〈彼らのそばに立っていた〉のはイエスではなく、〈白い衣を着た二人の人〉つまり天の御使いでした。

天使はイエスが〈あなたがたを離れて天に上げられた〉のだとはっきりと宣言して弟子たちの淡い期待を打ち砕きます。

言い方を変えれば、これもまた〈父がご自分の権威をもって定めておられる〉時までイエスは天におられ、地上にはおられず、したがって肉体的には使徒たちから〈離れて〉いると天使は宣言したのです。

だから使徒たちはもはやこの地上でイエスの姿、からだを、肉眼で見ることを求めたり願ったりしてはならないということです。

しかし、同時にイエスが〈天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります〉と言ってイエスの再臨をはっきりと告げ知らせました。

このようにイエスはわざわざ〈使徒たちが見ている間に〉〈天に上げられた〉ことによって、十字架で死なれよみがえられたご自身が必ず再び〈天〉から地上に来られるという信仰、希望、慰めを使徒たちにお与えになったのです。

そのように使徒たちを離れて天に上げられたイエスは御使いを通して、イエスの証人である使徒たちに大いなる戒めと大いなる希望を与えてくださいました。

その恵みを受けた使徒たちがなすべきことは、イエスの約束のみことばに信頼し、喜んで従い、エルサレムにとどまって祈ることでした(12-14)。

〈彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰った(ルカ 24:52)ともルカは記しています。

ルカは十一人の使徒たちの名前を改めて一人一人挙げました。(13)

彼らは皆40日ほど前には自分のいのち惜しさにイエスを見捨てて逃げ、ユダヤ人を恐れて家の戸を閉じていましたが、イエスが天に上げられたことをはっきりと見、その天から再び来られるイエスの約束を聞いた彼らは確かに以前とは変えられていました。

そんな11人に加えて、〈女たち〉(「妻たち」とも訳せます)〈イエスの母マリア〉および〈イエスの兄弟たち〉のことが書かれています。

〈イエスの兄弟たち〉も、イエスがこの地上におられたときには(十字架で死なれ、よみがえられる前には)イエスを信じていませんでした。(ヨハネ 7:3-5)

しかし、よみがえりのイエスが彼らにも現れ、彼らもイエスを信じ、イエスの弟子として歩み始めていました。

イエスの弟子でありながらイエスを否認し、見捨てて逃げていた者たち、イエスの肉親

でありながら頑なにイエスを信じなかった者たち、そんな人々が一つ場所に集まって〈いつも心を一つにして祈〉るようになったこと自体が、神の力、神のあわれみによることでした。〈(彼らは)いつも宮にいて神をほめたたえていた〉(ルカ 24:53)とも書かれています。

彼らがエルサレムで〈いつも心を一つにして祈っていた〉祈りは約束の聖霊を待ち望む祈りだったことは間違いありません。

「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。…天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」(ルカ 11:9-13)とのイエスの約束を思い起こしていたかもしれません。

最後の晩餐のときの、また昇天直前のイエスによる聖霊の約束を彼らは思い起こし、その約束に基づいて彼らは天におられる父なる神に〈いつも心を一つにして祈〉りました。

そして神の右の座にお着きになったイエスは〈いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられ〉(ヘブル 7:25)、やがて定めるときに約束の聖霊をお送りになります。

私たちが、いつも生きておられて天で私たちのために御父にとりなしてくださり、再びこの地上に来られる主イエスの御名によって父なる神に、聖霊の満たしを求めて〈いつも心を一つにして祈〉りましょう。

「わたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいませ。」(ヨハネ 14:16)

「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいませ。」(ヨハネ 14:26)